

アジア地域研究計画策定のための ユフロ・ワークショップ

浅川 澄彦

去る7月16日～27日の間、スリランカのキャンディで、ユフロが企画立案した表記の会議が開催された。「多目的樹種の生産増大」という共通の問題に関連した研究のネットワークをつくることを狙いとしたもので、25か国からの46名の参加者のうち、地域内の発展途上国12か国からの参加者が25名を占めたと特記されている。筆者は1982年1月以来、ユフロのアジア地域の理事をつとめているため、この画期的な会議には是非出席したかったが、諸般の都合で結局実現しなかった。しかし、会議の10日後8月6日には早くも報告書(関係各国の政府や資金拠出機関に送る目的でまとめられたもの)の第一草稿が、ユフロ本部の特別コーディネータの復命書の写しとともに届けられた。因みに、ユフロ理事会は、この事業のために昨年7月に特別コーディネータ(SCDC, Special Coordinator for Developing Countries)を指名した。

ご存じない方もあると思うので、この会議が何故もたれることになったのか手短かにご紹介しておきたい。1981年9月京都で開かれた第17回ユフロ世界大会で、発展途上国の林業研究を強化、推進する必要性が論じられ、結局同大会の決議の一項に加えられるとともに、世銀、FAOと共同の勧告がだされた。新しい理事会は、1982年発足以来その具体化に真剣に取り組んできた結果、国際機関や先進諸国から資金をひきだし、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの3地域にわけて、地域研究計画の検討を行なうことになった。その第一弾がこのワークショップで、SCDCに指名されたO. FUGALLI氏の精力的な活動によって、とにかくほぼ予定どおりに開催にこぎつけた。なお資金は世銀、FAOなどの国際機関からでたほか、米国、カナダ、スエーデン、西独の国際協力事業団にあたる機関も貢献していることを特記しておきたい。

ところでこのワークショップで何が行なわれたのか？ まだ技術的報告書は配布されていないので詳しくご紹介することはできないが、事前に送られてきたプログラムと前述の広報的報告書などによる概要は次のとおりである。「地域開発における多目的樹種の役割：社会経済的研究の必要性」と題する、FAOアジア太平洋地域事務所長(S. S. PURI)の基調講演のあと、前掲のメインテーマにむけて、育種と繁殖、造成・保育技術、生産性の増大と維持、造林と経営の4つの討議分野にわけ、合計15篇の報告が発表され、主要な課題についての現状と問題点が整理された。これらの報告は、域内途上国の指導的研究者にかなり早くから指名で依頼されていたものであるが、

ASAKAWA, Sumihiko: The First IUFRO Research Planning Workshop for Developing Regions, Held in Sri Lanka

農林水産省林業試験場造林部

SCDC の復命書によると出来ばえはかなりまちまちであったようである。ほかに3篇の特別報告、数篇のもちこみ報告などがあったが、4日間にわたる討議のあとは、各分野の討議リーダーと取りまとめ担当者(指名された先進国の専門家)たちが、討議結果をふまえて研究推進のための計画書(案)を作成、後の数日間はこの素案を中心に討議を行ない、計画書を完成した模様である。

前掲の報告書草稿によると、アジア地域における林業研究の優先性を考える上での主要な問題として次のような点をあげている。アジア地域でも約6億の人々が燃材の不足に直面しており、副次的林産物の生産も考えての早成樹種の研究、放棄されている農耕跡地の生産性を回復するための研究が必要である。約2億の人々の生活が荒廃した土地要因によっておびやかされているといわれるが、荒廃した流域の緑化もまた緊急な研究課題であり、この場合にも燃材や家畜の飼料を保続的に生産できる早成樹種が中心となろう。熱帯雨林地帯でも、人口圧力に伴なう農耕地の拡大が大きな問題となっている。ここでは、果樹、多年生農作物、林木などを組合わせて保続的に生産増大をはかる研究がとくに必要である。これらの地帯に共通する問題として産地試験などによる優良系統の選抜、それらによる採種園の造成、無性繁殖技術の改善などをあげているが、とくに無性繁殖による優良系統の増殖が収量増大に大きく貢献しうることを強調している。対象樹種については、国、地帯によって異なるとしながら、次の10群を暫定的にあげている。①アカシア属(*Acacia nilotica*, *A. auriculiformis*, *A. tortilis*, *A. senegal*), ②竹類, ③*Albizia* 属, *Leucaena* 属, ④ユーカリ属(*Eucalyptus camaldulensis*, *E. microtheca*, *E. deglupta*, *E. urophylla*), ⑤*Dalbergia sisso* (シタン的一种), ⑥*Azadirachta* 属, *Melia* 属(センダン科), ⑦ラタン類, ⑧*Prosopis cineraria*, ⑨ヤナギ属, ハコヤナギ属, ⑩(a)*Alnus nepalensis* (b)*Grewia oppositifolia*。研究推進のネットワークはまず樹種ごとに組立てるよう勧告されており、実際にはIDRCとユネスコの援助によってすでにつくられているラタン、竹、マングローブの例を参考にすることになっているが、一方で、育種のようなトピックについては研究項目によるネットワーク組立ても必要であることを指摘している。何れの組立てにしろ、各ネットワークごとに指導的研究者、特に関係のある域外の研究機関、資金援助機関などを見出すことが必要である。

さてこのワークショップは、SCDCの自己評価によれば、掛値のないところ、当初の目的の約7割は達成したとしている。確かに、ユフロがこの大事業を進めるにあたって掲げた目標のうち、地域研究計画策定の触媒となる、主題に関わる当面の研究課題策定に貢献する、長期研究計画のための体系的枠組みを示唆することなどは、今回のワークショップで果されたものと思われるし、地域の研究機関の適性を確かめ、計画推進に必要な資金をひきだすことも可能であろう。問題は、このワークショップを契機として形成された、乃至は形成されるであろう研究ネットワークが、今後いかに有効に機能するかであろう。この辺の具体的な戦略がいまひとつ明確でないが、いづれにしろ、地域内の林業先進国として、進んでこのようなネットワークに貢献していくべきだと考えている。